

横山幸三教授と新進の気風

竹谷悦子・長岡真吾

今にして思えば、横山幸三教授の御著書『伝統と実験——フォースターとウルフの世界』（昭和63年、成美堂）のタイトルは、ご自身の文学世界の特色を端的に象徴したものであった。「伝統」という継承されるべき不動の価値観を維持しつつ、一見それとは対極に位置する「実験」精神をも失わずに常に新しい可能性を追求していく。その相反する方向性が、横山教授の文学研究においてはあたかも互いを補うかのごとく融合している。それはいわば「伝統」と「実験」という別々の糸から織りあげられた一枚のつづれ織りにも似ている。

横山教授は、20世紀イギリス小説の研究者として、一方では伝統的なテキスト解釈を緻密に実践しつつ、他方では時流を先取りするような文学研究も同時に模索されてきた。例えばジェンダー・セクシュアリティ研究が主流になるずっと以前に「E. M. Forster と同性愛」（昭和56年、『英語教育』）や「E. M. フォースター小論——小説の絶筆と同性愛をめぐる」（昭和57年、『Otsuka Review』）など、いずれも先見性に富む論考を発表なさっている。さらに従来
の国家文学の枠組みを超えた「英語圏文学」という新しい視座からの研究の可能性にもいち早く着目され、平成10年に筑波大学に発足した「英語圏文学フォーラム」の会長に就任、後に『英語圏文学——国家・文化・記憶をめぐるフォーラム』（横山幸三監修、平成14年、人文書院）として結実する活動を包括的に支えてくださった。横山教授からすれば、フォースターやヴァージニア・ウルフに始まり、ウィリアム・クーパー、マルカム・ブラッドベリー、ジョン・ファウルズらを経て、ティモシー・モウに至る確固たる批評意識の流れが基盤としてあり、その上で「中国系英国作家の世界」（平成3年、20世紀英文学研究会）や「英語文学の今日——英国性と非英国性」（平成4年、大塚英文学会シンポジウム）などの口頭発表もされてきたのであるから、あるいは当然の進路であったのかもしれない。「英語圏文学」とは、単に英語を母語とする国々の文学を総括したものではなく、むしろコモンウェルス文学からポスト・コロニアルな問題性へと展開する時流において、英語という言葉が作家の創作活動によって

文化的・政治的な社会変容の媒体となっている側面に注目しようとする視座である。「伝統」を破壊するのではなく、そのあり方自体を問い直そうとする「実験」的試みである。その意味でも横山教授はやはり先駆者の一人であったと位置づけることができるだろう。

伝統といえば、横山教授が、東京教育大学から筑波大学へと続いてきた伝統をこよなく愛してこられたことはつとに有名である。それは幾度にもわたって東京教育大学／筑波大学との運命的ともいえる巡り合わせがあったことを知れば納得がいく。若干15歳の横山少年が英文学を志したのは、実は福原麟太郎教授が東京教育大退官にあたって『朝日新聞』に寄稿された文章（昭和30年3月11日付）に啓発されたせいであったという。その意志のとおり昭和38年に東京教育大学英文科を卒業、一旦は高等学校教諭の職に就かれるが3年後に大学院文学研究科に進学するため再び母校のキャンパスに戻られる。昭和43年、大学院修了と同時に大妻女子大学文学部の専任講師に着任、47年のロンドン大学（ウェストフィールド・コレッジ）留学を経て、61年までのほぼ二十年にわたって大妻女子大学で教育研究歴を積まれる。そして昭和62年、筑波大学と名前を変えた母校に、今度は教授として迎えられるのである。その後は早くも学内の要職を歴任、すなわち平成4年から2期4年間は現代語・現代文化学系長（評議員と併任）、平成8年からは企画調査室副室長として管理運営の中核で活躍された。

横山先生（と親しみを込めて呼ばせていただく）は、後輩の「実験」に対して常に開かれた心を示された。現代語・現代文化学系において、同僚として一緒に仕事をさせていただいたことは本当に幸運であったと思う。先生は、けっして派手に叱咤激励したりはなさらなかったが、私たち若手の研究者の異なる研究テーマや方法論に対して寛容で、それぞれを尊重して下さった。若手の研究者が萎縮することなく、自由に研究ができる環境を、学系長として、教授として、そして英語圏文学フォーラム会長として、常に作って来て下さったことを、私たちは心から感謝している。いつも紳士で、52歳の若さで学系長に選出されるほど人望が厚かった横山幸三先生は、その一方で休日にはテニスやゴルフを楽しまれる、いつまでも若々しいスポーツマンでもある。先生のますますのご活躍から目が離せない私たちである。